鈴木愛美／咲くやこの花インタビューvol.50

鈴木愛美（すずき・まなみ）【令和7年度　音楽部門[ピアノ]】

何百年と受け継がれる楽曲の核心に触れるような演奏を求めたい

清廉な響きと作品との誠実な対話で高い評価を集める、いま注目の若手ピアニストのひとり、鈴木愛美さん。2024 年には第 12 回浜松国際ピアノコンクールで日本人初の第 1 位を獲得し、室内楽賞、聴衆賞も受賞。2023 年にも第 92 回日本音楽コンクールピアノ部門第 1 位および岩谷賞（聴衆賞）、第 47 回ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリおよび聴衆賞に輝くなど、めざましい活躍を見せています。

技巧を誇示するのではなく、「楽譜に書かれていること」を丁寧にすくい取り、シューベルトらの内省や詩情を真摯に響かせる音楽性が大きな魅力。地元・大阪府箕面市の特命大使就任を皮切りに、大阪でのクラシック音楽の普及や文化振興への寄与も期待されるなか、「咲くやこの花賞」を受賞した鈴木さんに、いまの思いを聞きました。

取材・文／岩本和子

「受賞はただただ運がよかった」

「咲くやこの花賞」受賞、おめでとうございます。受賞のお知らせを聞いたときは、どんな印象でしたか。

嬉しかったです。過去の受賞者の方もすごい方ばかりですし、アバンギャルディさんたちと自分の名前が並んでいるのが信じられないというか、光栄です。

鈴木さんは何歳からピアノを始められたのでしょうか？

4 歳の頃から習っていました。兄がピアノを習っていたので、私も一緒に弾き始めるようになって、習い始めたのがきっかけです。鍵盤を押すと音が出るのが楽しくてやり始めた感じで、親に習わされたというよりは、兄と一緒に弾きたいと思うようになって習わせてもらって。とにかく楽しくて、ずっとそういう感じです。ただ、兄はすぐ辞めました（笑）。

そうなんですね。音楽一家だったのでしょうか。

全然そんなことなくて、親は全く音楽の知識もありませんでした。子どもの習い事の一環として、まず兄に習わせてみたのだと思います。

ピアニストの道を歩もうと思われたのは、いつだったのでしょう？

明確にピアニストになろうと思ったことはなく、中学生、高校生とだんだん大きくなるにつれて、これから先、ずっとピアノを弾いて暮らすことができたらな、ピアノがずっとそばにある生活だったら幸せだなと思うようになりました。今、運良くそんな生活をさせていただいているという感じです。もうピアノのない生活は考えられないです。

学生時代はどのくらい練習されていたのでしょうか？

中学、高校の時はそんなに練習していなかったのですが、大学生になってからは何も予定がない日は7、8 時間は弾いていたかなと思います。ピアノを弾いて、毎日楽しいということはもちろんありませんし、自分の気持ちがピアノに向かう日と向かわない日の波も多少はありますが、ずっと弾き続けることは苦ではないですね。

英才教育を受けられて、猛練習をされてきたのかと思っていたのですが、すごく楽しそうにお話をされていて、勝手に抱いていたイメージとは全く違いました。

英才教育も羨ましいなとも思います。子供の頃からたくさんのレパートリーを勉強することは素晴らしいことだと思います。ですが、私はのびのびと育ててくれた両親にとても感謝しています。

近年、様々な賞を受賞されました。2023 年から 2025 年にかけての充実ぶりを、どういうふうに受け止めていらっしゃいますか。

ここ数年は本当にせわしなく毎日が過ぎている感覚なので、自分が何かを実感するような、客観的に見る瞬間はそんなに多くなくて。でも、本当に運が良い数年間だったなという感じです。「浜松国際ピアノコンクール」も世界から素晴らしいピアニストが集まる中で、まさか自分がこういう結果をいただけるとは表彰式の時まで考えてもいませんでした。芸術は個人の主観も入りますし、人が審査をして決めるので、そういう点においても、ただただ本当に運が良かったなと思います。

たゆまぬ努力の裏付けだと思いますが、実績を残したいなとか思いながら活動されてきたのでしょうか。

そうですね。そんなにうまくいくとは思っていませんでしたが、何か結果を出してというか、演奏会という機会をいただけるきっかけが欲しかったです。

環境は変わりましたか。

そうですね。環境はすごく変わったと思います。

今は各地で演奏会をされていますね。1 月 23 日にはロンドンでデビューもされました。ロンドンはいかがでしたか。

楽しかったです。演奏会では、ロンドンに住んでいる日本人の方も来てくださいましたが、ほとんどが現地の方でした。すごく嬉しい言葉もかけていただいて。私はちょっと時差ボケで、ぼーっとしていたのですが、嬉しかったですね。

声をかけてくださった言葉で、印象に残っていることはありますか。

「これまで聴いたシューベルトの中で一番美しいシューベルトだった」とか、「この曲でこんなに感動したことはなかった」とか、「こんなにいい曲だったと知れて嬉しい」みたいなことを言っていただきました。

楽譜に丁寧に向き合うことを大切に

素敵なお言葉ですね。「咲くやこの花賞」の贈呈理由に、「楽曲に書かれていることを丁寧にすくい取る姿勢がかえって個性となっている」という講評もありました。作品に向かうにあたって、鈴木さんが一番大事にされていることは何でしょうか？

まず、よく楽譜を見ること、読むことを大事にしています。ただ、楽譜にはいろんな指示が書かれていますが、それを守って弾くということではなくて、どういう意図でそう書かれているのか、どういう思

いなのか、細かく考えながら、想像しながら音にしていくということを大事にしていますし、それがすごく楽しいです。

そのスタイルはいつごろからでしょうか？

高校 3 年生の頃から今も石井克典先生に習っていて、先生がそういうことを本当に大事にされていて。どれだけ楽譜を読めるかとレッスンで毎回、言われていたので、石井先生のご指導がすごく大きかったかなと思います。

丁寧に楽譜を読むことで、時間の経過によってそれまで見えてこなかったことも出てくるのでしょうか？

そうですね。私はそれがすごく楽しいです。ピアノをやっている方の中には、同じ曲を弾いていると飽きてしまうと言う方もいらして、それは全然悪いことではないのですが、そういう話もしたりする中で、私は真逆で、弾けば弾くほどというか、前に演奏した曲を少し時間を置いて向き合ってみると、全く違う景色が見えて、なんであの時この音色を選んで弾いていたんだろうとか、なんであの時こういう弾き方をしたんだろうということもあります。私は、前に弾いた演奏に戻すことは絶対にしたくないと思っていて。いつも新たな可能性を見つけたいなと思いながら取り組んでいます。

それは演奏を固定したくないということでしょうか？

固定してしまうと新鮮味もなくなります。音楽は生き物なので、自分も何のために弾いているのかわからないし、聴衆の立場で聴いても、演奏を前に戻してクオリティが上がるということはあまりないと思っています。この時が一番良かったという多少の高低差はありますが、演奏に満足したことはあまり

ありません。

何回向き合っても新たな発見がある作曲家はいますか？

私にとってはシューベルトが本当に特別な作曲家です。演奏会で弾くたびに作品を残してくれたことに心から感謝しています。

それはどういうところでしょうか？

シューベルトは私など足元にも及ばない天才なので…。シューベルトに限らず、何百年と弾かれている作品は、ものすごく強烈な力を持っていると思います。時代や文化、国境など何も関係なく、人間の真理に触れる作品が今も存在していることにも、心から感動します。

「咲くやこの花賞」を贈るなら、あの会社

お話は変わりますが、『踊る！さんま御殿!!』に出演されたとお聞きしました。バラエティ番組は初めてだったんですか。

はい、初めてでした。プロの方の凄みを生で体感しました。さんまさんもテレビで見るような、いつもの感じでいらっしゃって。本物だ！って思いました。皆さんのお話も面白かったですし、ただただ流れに乗っかっていたという感じでした。需要があれば、また出てみたいですね。

箕面市特命大使「箕面ピアノ音楽大使」でもいらっしゃいます。

箕面には高校卒業まで住んでいたので、地元の大使を任せていただけることは光栄なことですし、市長の原田亮さんも「箕面を音楽であふれる街にしたい」とおっしゃっていて、自分が何か貢献できたらいいなというのは考えています。去年、東京建物 Brillia HALL 箕面（箕面市立文化芸能劇場）でリサイタルをさせていただきまして、また箕面で演奏できたらいいなと思っています。

箕面もだいぶ変わりましたよね。

変わりましたね。路線が延びて、久しぶりに帰ったらすごく便利になっていました。

では、今後の展望を教えてもらっていいですか。

先ほど、何百年も残っている作品とお話をしましたが、自分がそういった作品を共有する立場として責任を感じますし、人種などに関係なくみんなが持っている普遍的な真理や核心に触れるような演奏を求めていきたいと思っています。

では最後に、鈴木さんが大阪市に「咲くやこの花賞」を贈呈するなら、大阪市の何に贈られますか？

「551 蓬莱」です。豚まんが昔から大好きです。